



高齢者の不安を解消?

ケアマネジャー 飯島 孝子

都内S区でのケアマネを再開しました。この2ヶ月間で感じたのは、高齢の方は、大きな不安感を抱いて暮らしているということです。10月1日より新しく担当になったTさんは、要支援1で一人暮らしです。

2年前ご主人様と息子さんを亡くされて、心配した親戚の方が、S区の見守り相談室に相談しました。S区では、窓口で待つだけでなく地域に出かけていき、町内会・老人会等とも連携し、困っている方に係わるようになりました。Tさんにも高齢者支援総合センター(注)の相談員である看護師・社会福祉士がそれぞれ訪問し、介護保険サービスを受けて生活されることを勧めましたが、このときには拒否されていました。

(注)「高齢者支援総合センター」: S区では、平成23年度に「地域包括支援センター」から改称されました。

2年経って、ようやくご自分の生活の不安感から、みまもり相談室に電話がかかり、そのご縁で私が担当ケアマネとして関わることになりました。

「この担当者は、大丈夫な人なのか」「契約をする」「印鑑を押す」などに強い不安感があるため、介護事業所との契約、デイサービスとの契約、福祉用具の契約と、ケアマネが全てに同席し、まずは信頼していただくようにして、ようやく介護保険サービスがスタートしました。

軌道に乗りだして一ヶ月。

今回は、病院通いが始まりました。

ほぼ毎日。自分の望んだような診断結果が出るまで、病院を転々とするのです。歩けなくなるのではないかと。胃もむかむかする。のどの違和感。検査結果も異常無しでしたが、全く信じません。

お薬手帳で確認すると、不安を抑える薬が、複数の病院から出されておりました。

高齢者支援総合センターの方々とも、心療内科の受診を検討しましたが、看護師さんは「ドクターショッピングだね。これ以上の受診は止めた方が良いのでは」というご意見。

幸い、不安を抑える薬も処方されているということに加え、近所の内科の医師には、何でも話せるということもあり、もう少し様子を見ることになりました。

それでも不安は無くなりません。

ケアマネの事業所にも、度々電話が入り「午前中に病院に行ったんだけど、やっぱり具合が悪いから、今から救急車を呼ぼうと思うんだけど・・・」

「具合が悪いので、今すぐ来てください」どんどん不安が増大してきました。ケアマネは、当初から比べると強い信頼感を得ましたが、逆に依存的な存在になってしまいました。それに追い討ちをかけたのが、Tさんが信頼している医師からの「ケアマネさんに施設を紹介してもらえば・・・」の一

言でした。事業所にも、「施設を早く見つけてください」の電話が度々入るようになり、遠くに住むご親戚に連絡。

Tさんは、たまたまお金がありましたので、ご親戚が住む近くの介護付有料老人ホームを見つけてもらい施設入所となり、2ヶ月で終了となりました。あまりに大きな不安感には、対応できませんが、なんとかご自宅で、様々な不安感を解消できるサービスは次のようなものがあります。ただ希望に十分応えるものとは言えないようです。

1、訪問看護・緊急時訪問看護

定期的なプラン以外に緊急時に看護師さんが来てくれるサービスです。日中であれば、空いている看護師さんが例えば体調不調時や数日排便が無いなどでも対応して貰えます。ところが夜間の利用はなかなか大変です。その日の当番の看護師さんが、訪問看護事業所の近くに住んでいればラッキーですが、そうでなければ、まずは電車、終電時にはタクシーで事業所に出社。それから必要な物品を持って利用者宅まで行くのに、早い人で1時間、遅ければ2時間かかることもありました。

警察や消防のようなわけにはいきません。緊急時看護加算と通常の訪問看護費に看護師さんの交通費もかかります。

2、訪問介護・夜間対応型訪問介護

サービスの提供時間は22時～翌朝6時までです。高齢夫婦で、介護1のおじいさんが介護2のおばあさんの介護をしています。医師より、おばあさんが倒れた時に抱き起こすために夜間対応型訪問介護サービスを利用するよう指示がありました。

夜間、たまたまおばあさんがトイレで、

紙オムツをつまらせてしまい床が水浸しになってしまいました。おじいさんが、「トイレがつまってしまった」と伝えたため「水道のトラブルには対応できません」ということで、訪問してもらえませんでした。

おばあさんは洋服の着替えもしたでしょうし、怪我の確認も必要だったでしょう。身体介護の必要があったにもかかわらず、事業所の配慮が足りず、うまくサービスを使うことができませんでした。

3、緊急通報システム

日中一人暮らしのKさんは、週3回の透析を受けています。台所の敷物に歩行器をひっかけて転倒してしまいました。

たまたま歩行器に緊急通報システムのボタンをくりつけておいたので、安全センターに通報ができました。

設置してあるインターホンから「大丈夫ですか？」の問いかけに「大丈夫です」の反応。「救急車行きますか？」の問いに「来なくても大丈夫です」と、応えてしまい救急車は来ませんでした。しかし登録してあるご家族に連絡が入り、ご家族がご近所の方をお願いし、その方が抱き起こしてくださいました。これは、うまくいった例です。もし緊急通報ボタンが、転倒した場所から離れている所にあつたら、こううまくはいきませんでした。

(◆北村 記 介護保険のサービスメニューは社会の現状に併せ3年ごとに変わっています。今回ご紹介したサービスは不安解消につながる一部です。地元にある地域包括支援センターにご相談してはどうでしょうか)